昔むかし

本庶家物語

ほんじょうけんいち

本庄氏大祖　畠山重忠公　畠山重宗公像

畠山重忠公像

畠山重宗公像

上記掲載＝像絵　新潟市蒲原神社蔵祀

寄稿するにあたり

花一会図書館に作家デビュープロジェクト実行委員会が設立され、その新しい作家の立派な出来映えの本をみて私もやってみたいと思うようになっていました。然し、費用がかかって手を出せるものではないだろうと思いながら窺ってみると、心配する程のない費用に是れは是非私も参加したいと考え、我が心から離れない先祖の話しを文章にしておきたく稿をおこすことにしました。

我が子供の頃に本庄家には名話が存在しよく語られ、又、風俗伝承など家の行事としてあり武家の厳格は他家と異なっていたと思います。だから私は生まれは昭和、育ちは明治だよと言ってやったら看護師さんは呆けが進んでいると思ったのか監視を強くされました。

今回の記は本庄家の名祖・名剣、あるいは当家に尽くされた名僧など、現代我が一族が知ることのない歴史を稿しました。

本稿を記すにあたり、新潟市蒲原神社史の記を許してくださった蒲原神社さん同市の伊藤善隆

先生にお礼申し上げる次第です。

本庄　憲一

目次

本庄氏大祖　畠山庄司重忠公
本庄氏の直祖とする　畠山六郎重宗公
霊剣小狐丸の太刀
戴大根と繁長公
天下の名刀本庄正宗の太刀
繁長公客席の将雲勝和尚
名将家との縁組
本庄氏大祖　畠山庄司重忠公

畠山重忠公とは、本庄家の大祖になります。

重忠公に関わる史誌は書籍で多くが語られていますし、私が尋常小学校の国史教科書でも習いましたが、その時は我が先祖とは知らずでした。ところが、本庄氏系図に紛れなく重忠が載っているのに気づき以来、畠山重忠記の書きものを多く読み深めてゆきました。

重忠は、長寛二年（一一六四年）に武蔵国大里郡の畠山館に生まれ、父は畠山重能にて、先祖に秩父武網があり、奥州後三年役で源義家一番軍を務め、源氏の白旗を賜ると本庄氏系図でも明らかです。

父重能の代に、畠山に移り畠山庄司となっています。時に平氏に従い京で大番役についています。重能は平氏の命により、源氏追討の北陸に向かい、木曽義仲追討に加わったが、平氏は総崩れし京に引き上げた。

ここに平氏の勢は衰え、都落ちの悲運を辿り西の海へ逃れたが、諸国の源氏が一斉に蜂起して、源平の戦いが起こりました。

重忠の母は相模国の豪族三浦義明の娘で、父重能の血をうけた烈士と記す誌もある、生まれながら才智にたけた人物とされ、まさに武士の鑑とされ、各誌とも鎌倉武士の模範と評されています。

伊豆に流されていた源頼朝は治承四年（一一八〇年）高倉宮以仁王の令旨を奉じ、平氏追討の兵を挙げ、御家人を召集した時、源氏歴代の恩を受けた諸国の武士たちは頼朝の麾下に馳せ参じた。

その時重忠の父重能は京に在り、重忠が一族を束ねていた重忠言うに

「源氏には四代の重恩がある。然し畠山が一旦平氏に従ったからには、平氏のため戦わねば」

と、頼朝攻めに軍をすすめた。頼朝は石橋山で大敗し房州に逃れた。

頼朝は勢力を盛り返し、武蔵国に兵を進めていた。重忠は一族を率いて源氏の白旗を掲げて長井の渡しに至り源氏の軍門に入るを申し出て頼朝の問いに答えて曰。

「その昔、源八幡太郎義家殿、出羽国清原武衡の討たれし時、我が四代祖秩父武網諸将に先じ討ち入りたる時、八幡殿から白旗賜り先鋒とされ、源氏に忠勤す。父重能も白旗を掲げて大功をた

てた。白旗は源氏の吉例として代々伝えてきたもので、縁起よき旗を掲げて参向しました。」と、言上したと誌々が謳っている。

都落ちして西の海に逃れた平家は、摂津の一の谷に陣を敷いた。

頼朝の弟義経は、一の谷を落とそうとひよどり越えに向かいその断崖を降ると諸将に命じた。重忠は赤糸縅の鎧で栗毛の馬に乗ったが、この難所を馬に鞭うつは不憫と労り手綱服帯でからげて鎧の上に背負い、岩間を縫って降りたとする話は有名なことで、居合わせた人々は東八ヶ国に大力あるとされたこの振舞いは人間業ではないと感嘆したとあります。

不意を突かれた平家軍は、なす術なく海上に敗走。やがて壇ノ浦に追い詰められ、平家は滅んだ。

頼朝は平家を討って鎌倉幕府を創設。将軍となって天下を掌握した。然し、奥州の藤原秀衡は頼朝に従わず、頼朝に追われた義経をかくまったことから、藤原氏征服に向かった。

義経は頼朝と異母弟で、平治の乱後鞍馬に流され後、奥州藤原秀衡の扶持をうけた合戦では、作法を度外視した戦法で連戦連勝をした頼朝の許可無く、にんかんしたがため、鎌倉入りを拒絶

され、奥州で殺害されたとされます。

奥州も頼朝の手に帰し諸将の恩賞を行った時、重忠へは奥州葛岡郡を賜ったこの地には重忠自ら管理せず、弟重宗を代官にさせたとされる。

文治二年四月八日、頼朝は鎌倉八幡宮に参詣した時、愛妾静御殿を召し舞を所望した。舞の曲に重忠が銅拍手を打ち、静の舞に合奏した。その時の静の詠んだ一首に

しづやしづ

しづのおだまきくり返し

昔を今になすよしもがな

重忠は武芸・弓道・兵馬の中に音曲を学び、風流な武士とされたとする。

鎌倉幕府頭初には優れた武将が生まれた中、営中に怪力無双と言われた武士に重忠は最も秀でていたという。大力を自慢する長居という武士と相撲を取り組ませたとき、長居は筋骨隆々として強く見えたが、重忠の力に長居は気絶したと誌した書籍もある。重忠は自己の怪力に決しておごることのない武士として評されている。鎌倉殿と仰がれた頼朝も宿命つき、正治元年五三歳を

一期として鎌倉に消えた。頼朝臨終に際し重忠に後継将軍頼家を頼まれ忠誠したが、外戚北条時政の権力で頼家他界。生母政子は頼朝死後、尼将軍として政事に君臨し時政がこれを扶けて頼家の弟実朝を将軍として権政をほしいままにした。

ここに時政の後妻牧の方がいて尼将軍に取り入り一門の繁栄を計ろうとした。元久元年実朝に夫人を迎える。正使に北条政範、介添に重忠子息重保が選ばれ上洛した。この時伊賀守平賀朝雅は京都守護としていた一夕の酒宴で重保と口論となり、朝雅は事実を曲げて牧の方に事の次第を言い送ったことで朝雅を弁護して、重忠が謀判を企てていると時政に告げた。又重忠一門の某が、重忠は幕府を怨み反逆の準備があると讒言を時政に告げ、稲毛重成は時政の計略に従い武蔵に使して

「鎌倉に凶変起こりし為直ちに馳せ参ぜよ」

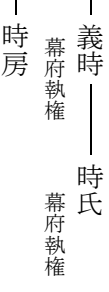
と、重忠を招いた。

使者の言により重忠は子の重保を先発させ、重保鎌倉到着の六月二十二日早朝、由比浜に反乱あるとして、重保を謀り討たれた。

一方重忠は鎌倉に緊急の召として郎党百三十騎を率いて出立ち、都築郡二俣川に達した時、鎌倉の大軍が待ち伏せ、六月二十二日夕刻、重忠は愛甲三郎秀隆の射た矢で戦死。ここに畠山一族は滅亡となった。

重忠は思慮深く一世を風靡したとされ、仁に厚く徳義に富み廉直の忠臣とされ、時勢とはいえ朝雅のざん訴、牧の方の毒舌、時政の奸計にあい、無実の罪で二俣川に散ったことは北条氏の謀殺に悔恨を後孫に遺すやるせなさを子々孫々に伝えたいと重忠公を稿しました。

北条氏系図



本庄氏系図

- 桓武天皇（人皇五十代）
  - 葛原親王
    - 高見王
      - 高望王（賜平姓）
        - 良文
        - 忠類
          - 将常（称秩父氏）
            - 武基
              - 武綱（奥州後三年）
                - 重綱（武蔵国総検校職）
                - 重広
        - 重能（称畠山氏）
          - 重忠（北条氏謀殺）
            - 重保（北条氏謀殺）
          - 重宗（兄重忠領葛岡代官）
            - 光長（称秩父氏）
              - 以降秩父季長越後国小泉氏地頭職称本庄氏

本庄氏の直祖とする畠山六郎重宗公

これまで重宗公の消息を示すものは殆んどなく、唯本庄氏系図にその名があるのみでした。平成二十五年親戚辻野家の縁者で、北広島市の五十嵐悦造氏からの情報が寄せられ、新潟市蒲原神社に重宗公が祀られていることが解りました。その時「新潟蒲原神社史」が届き、公の生涯を知ることができました。その概要を述べておく事といたします。

新潟蒲原神社史から

畠山六郎殿略記古記録

畠山六郎重宗本社へ下向の顛末を記した最古のものと推考される次の要約に、御木像は源頼朝に仕えた畠山六郎重宗という武士が、頼朝死後いささかの子細あって、貞応年中（一二二二～二三年）に、越後蒲原の地に下向して本社境内に庵を結び、朝暮大神に祈念参籠していた処満願の夜お告げがあって、出家して名を蓮千と改め自ら木造を造り、「未の至らばこの神と共に五穀豊饒民安全を守護すべし」と、深く遺言して社に安置したもの。その後六郎重宗公は社に祀られ、いよいよ霊験いちじるしくその誓い今に新たなので貞応の始よりこの世にひろむるものである。

史実を調べると重宗は、頼朝の陪臣で直接頼朝に仕えたのは兄重忠で、重宗は兄重忠の命に従った人物である。重忠は勇猛果敢を以って知られ、鎌倉幕府重臣の第一人者と目していたといわれる。

北条時政は、長子義時と共に、頼朝の没後将軍を託して幕府実権を掌握せんとの野心を抱き、重忠がいては事面倒で重忠謀殺を企て、元久二年六月重忠の陰謀が発覚したと称し、突如大兵を以って重忠を襲い、畠山氏を滅亡させた。文治五年頼朝の奥州征伐の際重忠は、論功行賞で奥州磐城国葛岡郡（かつおか又はかつらおか）を賜りその地の地頭職に補せられた時、弟重宗も兄に従い従軍し、兄に代わり葛岡郡地頭職の代官となり兄重忠、北条氏に謀殺され、畠山氏滅亡したので畠山氏の残党は北条氏に追われる身となり、貞応元年下向したとすれば重宗四十九歳ということになる。

六郎重宗は、重忠の領奥州磐城国葛岡庄の地頭職の代官をしていたが、この地にも程なく北条氏の末冠は必至とみてこれと一戦する兵力なく地頭役所を廃止、解散して葛岡を去り奥州に潜伏の末神原の地に下向して、本社境内に落ち着くことになったと推考される。その年代は貞応元年

というから、畠山滅亡後十七年目の北条義時の時である。

重宗公像記

本社の地に下向した畠山重宗が五社大御神に祈念参籠して満願の夜神告があり、それにより出家蓮千と名を改め、自木像を造り残したと六郎殿略記に記しいるが今一つ誰の肖像か判じかねていた。小田島允武著「越後野心」がこの二木像を重宗と兄重忠公の二肖像と記すべきものを重宗夫妻の二肖像と誤り記したため、後まで誤り伝えられて来たものである。後になって明治十六年八月付で本社神主金子慎吾詞掌が新潟県令に提出した「神社明細式」の中に、

境外攝社合殿　畠山六郎神社由緒

重宗君此時ニ方リテ手ズカラ刻スル所ノニ像ヲ留メテ曰我ガ魂魄此像ト共ニ永ク此ノ地ニ留マランwト則一ハ其兄重忠君ノ肖像一ハ則君ノ像ナリ

と記しているのが判明した。則ち肩の成り上がったいかつい顔の像は畠山家の家長で六郎重宗に幼少の時から畠山滅亡の時まで兄の命に従って行動してきた兄の肖像で、昔源平合戦でひよどり越えの剣を馬をかついで駆け下り勇名をはせたと伝えられる豪傑重忠の肖像であったという訳で

ある。この像武将の着用する軍帯を帯していることを見ても、現実武将の肖像であるこれに対して兄に比べると遥かにやさ型で合掌している像貌の像が参籠神告をうけて仏門に入った重宗公自身の像であったと思われる。

以上　改訂蒲原神社史から

霊剣小狐丸の太刀

本庄家代々に重宝として継承された刀剣に、国俊と来国俊の二振りを所蔵しました。国俊・来国俊は刀工の名で最も優れた刀鍛冶として武将は好んで所持されたとします。本家に育った子供の頃、世人が来ては小狐丸という本庄家の刀のはなしは面白くて耳を側だて聴き入っていました。その小狐丸という刀剣は繁長公の太刀で国俊の刀であることを当家の文章で知るようになります。その書付は、我が祖父本庄孝長が刀売却の証として遺されています。

国俊太刀の事

国俊ノ太刀ヲ異名小狐丸ト称ス

弘治三年繁長十九歳出陣ノ命アリテ船ニテ向フトコロ　ソノ日波荒ク船履リサフニナリ船頭驚キ

コノ嵐常ニアラス大将何カ宝物ヲ龍宮へ供へ給へト言フ　繁長佩刀国俊太刀ヲ海中ニ奉スルトコロ風波オサマリ波ノ上狐渡リ国俊太刀トナル　コレヨリ国俊ヲ異名小狐丸トツケ給フ

斯くなる逸話に毎度客人の語り部が奇妙を交えて語るその面白さは心から離れずに覚えていました。この太刀祖父孝長まで継承されたが売却したと遺されている。

国俊売却之次第

所持の国俊ノ儀　私先祖本庄越前守繁長

天文二十年八月より慶長十八年マテ所持在候内中弘治元年同三年永禄四年同五年同七年マテ

上杉謙信　武田晴信ト川中島ニ於テ相戦候時相用ヒ　ソノ他天正年間文禄元年三月秀吉公高麗征

伐ノ時　慶長五年福島ニ於テ伊達政宗ト相戦ヒ外数ヶ年相用候　ソノ後私マテ十四代持来候

明治二十四年四月九日

本庄孝長

国俊太刀売却

屯田兵第三中隊長　岩渕繁隆へ

江戸時代の宝暦四年（一七五四年）本庄職長の時、国俊太刀こと小狐丸の盗難に会った時の異変を記録に次のようにあります。

国俊太刀異名小狐丸、鮎貝の蔵から盗み取られ、山口村の源七が怪しいとして米澤の奉行が捕らえ白状に及ぶところその夜から源七の小屋鳴り渡り居合わせた者たち驚いたとあり又鮎貝の城辺りその夜から狐鳴き異常とあり、その品々戻った夜から狐鳴き止むと記され小狐丸太刀の霊験常ならず、その威徳霊威の奇特なる事子孫繁栄の瑞たるべしと記され霊剣であったことは事実と思い不思議なことです。

戴大根と繁長公（いただき大根）

戦前の昭和期まで本家の本庄家に奇妙な風習がありました。それは毎年の歳越の日と元旦三ヶ日には泥付き大根をそのまま三宝に戴かせて我が家の祖繁長八幡宮神殿に供え下げた後は家族全員が三宝の大根を両手にして顔面まで持ち上げ頭を下げ拝礼するのです。その儀の名称は知りませんが、「戴大根礼拝の儀」とでも言ったのかも知れません。その意義は次のことが語られていた。

戦国時代の先祖本庄越前守繁長公が主君上杉謙信公に背き越後の瀬波の城に籠城したため春日山（越後の在府）の大軍を迎えるとことになり、謙信公も自ら出陣して繁長を攻めました。時は永禄十一年三月～翌年三月まで激戦が繰り広げられ、繁長奮戦の中で大根を食して合戦に臨んだと語り継がれたものから、裔孫の誰かの時代からか繁長公の苦難の戦闘を忘れてはならぬとして、泥付き大根をもって先祖を偲ぶ戴大根礼拝の儀が始められたものと推考するものです。

この合戦を記した古文書は当家文書中にも存在し、詳しい戦記がしたためられています。この

合戦を「村上の戦」としてその期間三十数回の合戦があり、冬期に入り上杉軍は曳きあげたのを機としたか、会津の芦名盛氏、米澤の伊達輝宗により、謙信公とに和議となり双方とも勝負なく終ったが、本庄城の要害を春日山軍は陥すことができなかったことは繁長軍団の優れた戦略に及ばなかったのだろうか。

繁長臣下には勇将、名将が集り艱難辛苦の猛戦に耐え抜いたことは天晴れな事で、この土づき大根の戴の記を遺稿しておくものです。

天下の名刀本庄正宗の太刀

世に有名を馳せた正宗の太刀が先祖繁長公の御物となった時がありました。正宗の太刀とは当時相模国（神奈川県）の刀工正宗が鍛った優れた刀として重用されたという。天正十六年繁長公、山形城主最上義光と庄内（鶴岡市千安川）において、最上の大軍に勝利し士卒の労をねぎらっている処に、繁長旗本近くに紛れ込んだ武者一人繁長に斬り掛るところ組伏され刎らる時、この武者庄内大浦の城主東禅寺右馬頭と名乗る彼の佩刀相州正宗作という。これより是の太刀繁長公が納めて本庄正宗と称すとある。その後本庄正宗太刀の価値が評判になったであろう。元文四年幕府老中松平左近将監乗邑からの尋書があって、由緒を藩公に差出している。是の正宗の太刀は世にも稀なる絶品であったろう。秀吉朝鮮出兵のとき繁長公から関白豊臣秀吉へ進上し、以後徳川家康が貰い受け、徳川家代々の伝刀となり幕府最後の将軍慶喜から明治天皇に献上され、宮中の御物とされたとある。

旧文献に次のようにある

元文四年湯浅常山書之記

本庄繁長は越後の勇将なり　略

本庄・最上義光と出羽千安ヶ表にて軍しける時、最上軍敗北せしに義光の士大将東禅寺右馬頭口惜き事に思い取って返し首一つ提けて越後の兵に紛れ繁長めがけて只今敵大将討ち取って候、実検に入れ奉らんと言って馬に鐙を合わせてかけ寄り正宗の太刀を以って冑を打つ、明珍の冑なりしかば筋四つ削りたり繁長右馬頭を切って落し首を添えて景勝に出したり刀をば本庄に返し与えられしが後故あって東照宮の御刀となり本庄正宗といえるは此の刀なり。文禄元年三月秀吉高麗征伐御進発。肥前名護屋在陣したまふ時、繁長、義勝と共に秀吉公に拝謁仰付られ此節繁長より太刀一腰進上　本庄正宗

本庄正宗についての古書

大阪では家康、本阿弥と出羽大壌国路の斡旋で千両で買ふとあるが秀吉より家康もらいうけの礼に千両おくったといはれる。

その後徳川将軍歴代の傅刀となり維新のとき慶喜将軍から山岡鉄舟を通じ、明治将軍の傅刀したもので宮中の御物となっている。

山岡鉄舟（憲一調）

山岡は九歳のころ飛騨高山で剣術を学び真影流北辰一刀流の剣士、十三歳で禅学を修業。幕末の江戸城無血開城を西郷と組んで実現。明治天皇教育係勤

斯くの如く本庄正宗の太刀は世に稀なる大変な名刀であったことを窺い知るものです。

尚元文四年、老中松平左近将監乗邑から本庄正宗に付いて尋書書状が届き、書付を差出しているその尋書に、本庄正宗と申す刀、本庄越前守取持之道具之由及承候右取持候者由緒ニ茂在候哉

左候ハ者委細相尋之書付可被持見候

この時本庄義長から本庄正宗の由緒書付をこれまで稿した内容の件りで差出したものを湯浅常山がみて記したものであろうと考えます。

史料

本庄家文書

繁長公客席の将雲勝和尚

本庄家菩提寺に、現在福島市中興開山曹洞宗万年山長楽寺があります。この寺むかし越後で耕雲寺の僧、大仲玄甫大和尚により開山され本庄氏開基ですが、慶長三年越後の守護上杉景勝に会津移封があって、秀吉から臣下一人残らず連れ去れとの厳命があって、本庄家も菩提寺を同道せざるを得なかったと思います。

中興開山に長楽寺四世傑山雲勝をたて、福島城北外堀二の丸に本庄繁長開基を以って存在する名刹です。

雲勝和尚について知ることはできませんが、その座を物語るものに同市の繁長開基寺とされる腰浜曹洞宗龍鳳寺に繁長恩書　校書之事（長楽寺後見証）の二通が寺宝とし存在しますが次のように述べられたものと私流に読み取りました。

繁長恩書

おろかにも繁長鎧を着ること八十五度でしたが、その戦は薄氷を踏む危きもので命あって何と

か武運の誉れを得ることができました。然しながら貴公と出会いなくばその結果を出せなかったでしょう。是れは神仏へも深く感謝して、忘れてならず真心からもったいなく存じます。又、今まさに勅命の宣旨御卓をうけて護りり鎮め繁長八幡宮授く脈絡の悉く世に稀なる戦功ありといえども、尊公の恩沢浅かるものでなく、千のことばを以っても、高い山まで萬物を積んでも報い難きことで、私から宝物を贈るはそのひとつに過ぎません。恐れ多くも主君から當家に給る軍器軍服を表記して、恥かしき合わせ書を以って貴恩に捧げます。ねがわくば後世においても旧き霊が安らげるよう、ながく仏法にあずかって面目のたつことを望みます。

公惶謹言

慶長十五年三月十日

本庄越前守繁長　　印

前崇　傑山勝老和尚

次の校書の事は是又難解な文書で村上市の大場博司先生にご指導をうけ、私なりの仮名づけをして原文解読されたものです。

校書之事　（書物を比べて異同正誤を調べる）

一、今般長楽寺傑山勝和尚　（長楽寺中興開山　傑山雲勝大和尚）
去申之春就隈川辺干今　（阿武隈川）
龍鳳開地場被見立候処　（開山地）
則蒙免許既被及一宇建　（寺号許可）
立段加之向表達旧労　（昨年の暮）
被致隠居候条　最往々　（隠退）
奏客席列　併龍鳳寺者　（客分）
己来長楽寺之爲後見職　（補佐）
萬事指揮頼置間　勿論　（さしず）
時之移転交替之儀宣敷　（寺の移転往時交替）

可任評規処　校書　（品さだめただす）

仍如件

元和八年二月本庄出羽守

充長印

龍鳳寺

（校書の難解な箇所　村上市大場博司先生の指導をうく）

校書之事解説

今般長楽寺傑山雲勝去る申年の春阿武隈川辺りに、龍鳳寺開地場をもとめ見立られ候処、則ち既に免許を蒙られ、一宇建立に及さる段之に加え表向昨年暮に隠居被致れ候条最も往々は客席の列に奏み併せて龍鳳寺は己末長楽寺の後見職として萬事指揮を頼置間勿論時之の移転交替の儀宣敷評任べし異同正誤仮て件の如し。

繁長恩書・校書とも福島市腰浜の本庄家開基の、曹洞宗龍鳳寺が寺宝として秘蔵されているものにて他に寺歴の製本されたものからも雲勝大和尚の伝記もあって、才智に長けた繁長公の客将であったことが描かれています。私は去る日小和田哲男著の「戦国武将を育てた禅僧たち」を読みました。戦国時代の禅僧と呼ばれる軍僧が軍団の中に存在したという。大将は禅僧を伴って文筆の用、敵陣へ遣す使僧の役を担わせたとする。武士は戦に臨み、敵陣に攻め入り相手を倒す使命をおび、殺生を犯すことになり殺生は極楽浄土に往生するはのぞめない。そこで武士たちは戦陣に僧を連れ討死したその時、僧に十念を授けてもらい極楽浄土に生まれたいと願ったとする。右筆的性格や使僧的性格よりも、仏の教えを説き戦陣にある将兵たちの生きる支えを教えたとする。その他従軍医的側面、外交僧としての役割りや飛脚役も課せられ、戦国時代の飛脚は僧でなければつとまらなかったという。僧は出家の身であるため、戦いあっている敵も味方も関係なく各地を往来でき、武士が書状を持って敵地に踏み込めば殺されて仕方なしといい、僧なら書状を持って使いに行っても敵は僧侶を無縁の者とみて殺すことはなかったとする。禅僧による情報収集や発信も行われ敵国を自由に往来できる僧侶からの情報を得ることこそ価値があったという。

又禅僧は易者でもあったとされ、禅僧が密教的性格を有していたとされる要因は、足利学校に所似していることが小和田哲男著に著されている。

足利学校は歴史辞典にも記され、平安期から下野国の足利学校は史上有名にて、漢学・天文学・医学・兵学を訓えられたと説く。戦国武将たちの間では足利学校で易学を学んだ禅僧を軍師として招くことが盛んだったといい、禅僧は戦国武将のブレーンとなったといわれる。

なお「軍師参謀」の書に、足利学校とは軍師養成所で軍法陰陽道と修験道をミックスしたとい い禅宗の学校説をとり、近年の研究から下野国足利荘の足利義兼説が有力で、歴史辞典では関東管領上杉実憲が再興したとする。然し足利学校の創立は平安初期小野篁とも説かれている。以上の説を鑑みるときは傑山雲勝大和尚とは底知れぬ才智に優れた禅僧であって、先祖繁長公は傑僧を将に、戦陣八十五度の采配を執って福島城に没しましたが、恩書・校書の二書に雲勝大和尚の偉大をみて、その貴重な御人物を稿しおくものです。

文献

福島市腰浜龍鳳寺文書

歴史辞典

戦国武将を育てた禅僧たち　小和田哲男　著

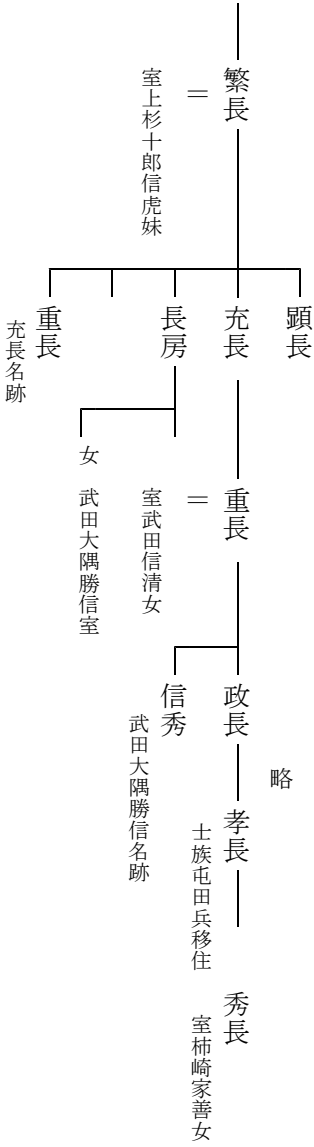
名将家との縁組

小生　わが先祖の探究に明け暮れるうち、神と先祖は切り離されない存在や我が家の格式ある戒名を拝し、自と敬神崇祖の念を深くしていきました。今や朝に祝詞を奉り夕に経を諷誦するも日課になっています。

武家時代の先祖たちは、正室の他に側室（妾）を何人かを抱え正室に男子が生まれなかったときは、側室の産んだ男子が家督を継ぎました。武家の家が繁栄した要因のひとつは一夫多妻の側室制があったからでしょう。武家間の婚姻は、相手の家柄が重視され自己より身分の低い家とは殆んど結ばれることはなかったでしょう。

それでは本庄家先祖の二～三例を見ることにします。

本庄氏系図（略）



以上の系図を見れば戦国時代繁長公に藤原出自の上杉家から興し入れされ、充長にかって上杉謙信の軍団で、武田信玄軍と戦った敵将の家の孫娘が興し入れしたり、又武田信玄の孫勝信へ本庄長房の娘が興し入れ、更に信玄の孫勝信とは密接な縁戚の間柄となり、本庄重長の子孫信秀を名跡として武田を継がせています。

上杉氏系図（藤原性）

- 不
  - 信虎（十郎）
    - 女（本庄繁長室）

武田氏系図

- 晴信（信玄）
  - 信清
    - 勝信（室本庄長房女）
      - 信秀（本庄重長男　勝信名跡）
    - 女（本庄重長室）

柿崎氏系図

- 祖大見氏
  - 略
  - 景家（越後国木崎城主）
    - 略
    - 家善（土族屯田兵）
      - 仁一郎
      - 女（本庄秀長室）

戦国時代柿崎和泉守景家と先祖繁長とは、春日山府にても顔を合わせる間柄とは云え謙信公第一の臣なる景家公は主君の命に従うのが武士にて本庄城攻めのため越後の岩船に着陣これは前章「戴大根」の項の合戦にて相対した過去を持つ家同志が縁組するという不思議なことは何時の世にもあることでしょう。

江戸時代になって武田信玄の子孫と本庄家が深い縁戚関係が結ばれましたが、その昔上杉謙信と武田信玄が信州川中島に戦った時、上杉輩下で繁長公は武田軍と戦い猛将として名を馳せた本庄氏であるのにそんなことにこだわらぬ潔よさはさすが互に武門の家である誇りは捨ててはいないだろうがと勝手に思っています。

おわりに

以上に稿した交々は読む人に奇怪と思われるでしょうが、逸話として世人にもしられていた話です。然し我が先祖である畠山重忠・畠山重宗お二人については、吾が在した本庄家では話にのぼった記憶がありません。唯系図に多少の歴が載せてあり、出版物には重忠公を記したものが多く著され学ぶことができました。

本庄家には菩提寺が澤山あって、平安・鎌倉期は埼玉地方、戦国期は村上市の曹洞宗霊樹山耕雲寺、同市の萬年山長楽寺、福島市に上記同山同名の中興開基長楽寺が、そして山形県白鷹町鮎貝に、伊達氏開基の同宗常安寺などあり、戦国末期・江戸期を通じ移封があって城替えされた為です。その中で長楽寺四世、福島中興開山長楽寺傑山雲勝大和尚は本庄繁長客席の将として優れた智策を以って貢献した禅僧でありました繁長公家臣団も優れた将が多く、繁長生涯八十五戦中負けがなかったと説く史家もおられる評価があります。

本庄繁長は、母の胎内で顔面に刀傷を負い、安産で世に出た霊性の強い魂を占めた武将でその霊験が没後更に高くなっていった物語が遺されていると言うのが本庄家話記を稿す訳でありまし

た。

往古の先祖を持つ我等末裔である為か、その辺り憚るのでペンすることはなりませぬが、姪子甥子に先祖があらわれたりし、奇妙なことがあるが是れは書控えなければなりません。

斬様なる史はやがて語られることも知る者もなくなるだろうから、今すべき事は是れと考え我最後の語りとして述べおくものです。

著者　本庄　憲一

発行年　平成二十七年５月

本庄家話記

２０１５年８月１日

著　者　本庄憲一

発行者　本庄憲一

出　版　らんこし作家デビュープロジェクト

© Kenichi Honzyou **2015**